

On Reading Mr. Monji's Memories of Professor Fujino

林田, 慎之助
九州大学文学部 : 助教授

<https://doi.org/10.15017/9821>

出版情報 : 中国文学論集. 3, pp.65-66, 1972-05-01. The Chinese Literature Association, Kyushu University
バージョン :
権利関係 :



資料紹介

門司勝氏の「藤野先生の思い出」

林田 慎之助

門司勝氏が、「藤野先生の思い出」を書いて、その掲載誌・「うわさ」七月号を贈って下さったのは、昨年夏の終りの頃であった。氏は、私がついこの間までつとめていた福岡教育大学の英語英文学の教授であった。どうしたものか、私の記憶の中に浮び出る門司氏の姿は、きまって冬仕度のそれである。茶色のソフトをふかくかぶり、ながめの黒いオーバーに細身をつつまれたその飄々たる風態は、目もとのすすしさと不似合いに、さながら、黄塵にのって、地上に舞いおりてきた勝手違いな魔法使いを思わせるものがあつた。

私が黄塵とついしやれてみたのは、門司氏と中国とのつきあいが、こちらの意識にあつてのことである。ほかでもない。此の度の、氏の思い出の対象となつた「藤野先生」にしてが、魯迅が「朝花夕拾」の中で描いた藤野先生のことである。仙台医学専門学校留学時代、解剖学の講義で懇切な指導をうけた魯迅が、終生、忘れ得ぬ異邦の師として仰いだ藤野巖九郎先生のことである。

門司氏は、九州大学を卒業して、まもなく福井県の三国中学

校で、教師をされていたことがある。この時、その三国港の町には、すでに故郷の人となつた藤野先生が、医院をいとなみながら、その余生をおくっておられた。そこで縁あつて、氏は藤野先生の恰好な囲碁相手になられたというしだいである。

門司氏がその中学校に赴任されたのは、昭和八年で、御父上の後任であつたと聞く。その頃の日本の社会は不況の底をついていた。経済学部を終えて、セツルの仕事に関係していたため、左翼活動家とみなされた氏が、九大生百余名とともに検挙されたのは、その前の年のことであつた。

此の思い出のなかで、門司氏はそんなことには一向にふれてはいない。しかし、暗く重い青春のあしどりの末に、氏がようやくたどりついた北陸の小さな港町で、全くの偶然とはいえ、魯迅の「藤野先生」と邂逅することができた喜びは、たしかに、自分の人生の一記録として書きとめるにふさわしい事柄であつたにちがいない。そのためか、氏が親しく接するようになってからの、晩年の藤野先生のと看おりの風貌姿勢は、緊動な回想風のタッチのなかに、まことに刻明にとらえられている。

門司氏と、中国との関係はそればかりではない。昭和一二年には、神明高等女学校の教官となって大連に渡り、「満州文話会」の仕事に熱中されている。その頃の氏の著書に、「中国の少女」というのがあって、中国で最初の女性弁護士としてわがれ、のちに上海法制大学々長になった鄭毓秀女史の自伝等を題材とした中国女性史物語であったと聞いている。

昭和一八年になると、門司氏は大連の女学校を去って、北京の燕京大学内華北総合研究所に勤務。この研究所の副理事長をしていたのは、これもまた偶然であるが、魯迅の弟の周作人であった。周作人といえば、新中国成立以後、奸漢として北京の地に幽閉同然の生活を送り、さきごろ、わびしい境遇のなかで、その生涯をとじている。周作人は徒然草を愛好したすぐれた日本文学の理解者であり、その紹介に果たした功績は忘れがたい。とりわけ、その隨筆は、古今東西にわたる学識がみずみずしい感性に融和されていて、絶妙であった。それだけに、その結末は、今日、兄の魯迅が革命文学の先駆者としてあがめられているのとは、あまりにも対照的にうつつて、あわれであった。

ところで門司氏が戦争末期の北京で見聞された周作人の印象は、日本軍支配の状況下にあつて、批判をあからさまにすることはできなかつたが、それを内に秘めて、中国知識人としての毅然たる態度を、終始、くずさなかつたという。それは、そうであつたであろうとわずきながら、私はなぜか心鎮まるものがあつた。

この北京での周作人の複雑な立場、晩年の藤野巖九郎先生の動静等について、その一端をきいて、ふかく興味をそそられた

のは、氏が福岡教育大学を無事に御退官になるのを、お祝いする宴の席であつた。昭和四四年の初春のことで、その頃、まだ私は、その大学の同僚であつた。

その席で、門司氏にそれらの話を是非ちかいうちに書きとどめていただきたいと御願ひし、そうでなければ、氏のお話を記録にとつて残しておきたいものだ并希望しておいた。

門司氏がそれを心に留めて下さつたのは、有難いことであつたし、これで、氏の記憶の底に、ながい間しまわれていた晩年の藤野先生が鮮かに動きだしたのは、なによりうれしいことであつた。

仙台時代の藤野先生のこととは、別にそれを伝える適当な人がいて、それはそれでしだいに堀りおこされている感じがする。それにくらべると、三国港の町における藤野先生の晩年の生活を語り伝えてくれる人はとりわけ少いように思われる。これは、その意味でも、魯迅の「藤野先生」を知る上で、大変貴重な資料となると考え、氏の御諒解を得て、「うわさ」（博多の郷土芸能誌）七月号より、全文を転載し、次に紹介することにする。

ちなみに、門司勝氏は明治三八年大分県の中津市で出生。現在なお福岡女学院短期大学の教授として御活躍中である。（一九七二、三、一〇）